

第10回 JACS Japan
全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ2016

第10回 JAPAN 全日本学生建築コンソーシアム 住宅設計コンペ 2016

Competition theme

「思いやりのある戸建て住宅」

出題主旨:

住宅は利己的です。

限られた敷地、限られた予算のなかで最大限豊かなインテリアをつくることを目指しますから、それは当然です。敷地の周りに柵をめぐらせて、隣にどんな利己的な家が建てられても関係なく、自分の家が守られるようにしようとします。どんな近隣が現れるのかわからないから、それは当然です。

もし、周囲の環境に思いやりのある利他的な住宅があるとすれば、それはどのような住宅となるのでしょうか。そして、もちろんその住宅は最大限豊かなインテリアをもってなくてはなりません。そんな夢のような「思いやりのある戸建て住宅」を発明してください。

その発明されたあなたの「思いやりのある戸建て住宅」が、ほんとうに周囲の環境に思いやりがあるのか、集合させて検証してみたいと思います。それが「群設計」をお願いする理由です。「思いやりのある戸建て住宅」の集合が、私たちの目指すユートピアを指し示してくれることを期待しています。(北山恒)

追加説明:

今回は第10回を記念して、新しい試みを行います。

例年行ってきた第1次審査、第2次審査の他に、これと並行して「特別・群設計審査」と「特別実現採用審査」を行います。

これは今回の敷地6区画の中において、更に全体のあり方が提案されているか、を審査するものです。単独にバラバラなものが建てられては、現代の住居群のような混乱、混沌と変わりありません。

それを、その区画で、たまたま知り合った建築家たちが、できるだけ協力し合って、「群」として或いは「集団」として良いものにしていくとする意志に期待するものです。これは町全体に対する姿勢であり、その区画の居住者たちにとってのより良い提案でありたい、という試みです。

近年、良いつけ悪いつけ問題を含みながらもネット社会は進んでいます。今回は、偶然組み合わされた「5人」が、ネットを利用して交流し、建築を志す者同士で一つの「作品」を目指して成果を上げることを目指す、という挑戦です。(吉田研介)

審査員: 吉田 研介



Kensuke Yoshida
吉田研介建築設計室

乾 久美子



Kumiko Inui
乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学大学院Y-GSA教授

吉村 靖孝



Yasutaka Yoshimura
吉村靖孝建築設計事務所
吉村靖孝建築設計事務所

群設計審査 特別審査委員
北山 恒



Koh Kitayama
architecture WORKSHOP
法政大学教授

審査員講評

今回、これまでに聞いたこともない「コンペの試み」に敢然と挑戦され作品を出されたみなさんに拍手を送りたいと思います。しかも1次審査に合格された方々は、称賛し祝意を贈ります。コンペにエントリーすることは簡単ですが、出さなくても構わないのに、完成して提出することがいかに努力とエネルギーの要ることか、そして能力が無ければできないことか、経験から十分承知しています。提出された方は自信を持ってください。とにかくおめでとう。そこで内容。例年は模型の台がA2サイズで、その中に敷地を作り、周囲に余白が有る状態で提出されました。だから見栄えが良かった。今回は敷地のサイズがそのままパネルで、だから5軒を並べると、アレッというほどくつついで混み合って、自分の模型が栄えなかつたのではないか?これが街の中の現実です。そんな時どうすればいいのか?私は「都市性」が必要だと思っています。それは「集まって住む」時の倫理観です。簡単に言えば抑えること。それがあつて、次に人の為に何かすることを考える。今回、それより「やさしさ」の為の受け狙いが表に出過ぎていたように思いました。

●気になつてしまふこと、「造形の腕を磨きましょう。」

吉田 研介

「思いやりのある」戸建住宅のあり方を問うだけでなく、それを具体的に確認するために、一次の提案を主催者側で集合させ、5人のグループにして二次までに調整させるというエキサイティングな設定のコンペであった。最優秀の奥野案は家そのものを最小限にして、庭というごくあたり前のパッファーを用意するという提案で、室内面積の最大化を前提とする戸建住宅商品のあり方そのものをするべく批判していた。さらに、庭に住民が増築することを想定することで、パッファーとしての庭と室内面積の確保の両立を時間をかけて行うことも提案しており、「思いやり」を商品として提供することのやうなものも批判的に浮かび上がっていた。福岡案も家を最小限化するよう案だった。それにより生まれた庭をコモンズとして周辺住民に利用してもらうとともに、独居老人に設定した住民の見守り体制もつくるというもの、おもいやりはギブアンドテイクを前提とした上で成り立つのではないかということに気づかせる提案であった。

乾 久美子

アイデアコンペや卒業設計コンクールに、「賞を決めたくないムード」が漂いはじめたのはいつの頃だろうか。十年程まえにはすでに、最優秀を決めずに審査員個人賞だけを決めた記憶がある。なかには、十数名からなる審査員団がそれぞれ個人的に金銀銅賞を出すキルコス国際デザインコンペのようなものまで現れた。学生たちの競争アーレギーは、無視できない病になっている。しかし、建築はひとつの敷地にひとつしか建たない。その敷地における最高のデザインが提案できないなら、設計すべきでないという意味で、競争は必然である。今回のコンペでは、北山さんの発案で導入された群設計によって、思いもよらぬかたちで競争と協調が同時に問われることとなった。賞の撤廃では満たされなかつた協調性が、審査中にも学生たちのあいだにどんどん湧き上ってくるように感じ、膝を打つ感覚があつた。協調を重んじる世代が切り開く未来に、可能性を感じさせてもらつた。

吉田 研介

今年の3月に吉田研介さんから「住宅設計コンペ」の第10回を記念して、群設計の賞を設けたいというお話を受けました。その特別審査委員に任命していただきました。そこで、「思いやりのある戸建て住宅」という、周囲の環境に思いやりのある「利他的な住宅」の提案を求める課題としました。そんな審査を可能にするコンペのやり方を吉田さんと何度も検討を重ね、日本で、いや世界で初めてのコンペ形式を発明することになりました。コンペって競争をする場所なのですが、そこで友人をつくることになるという、新しい学生のための画期的なコンペができました。

まず、第1次審査では、提出された単体の図面だけで30作品が選ばれました。そして、第2次審査は、そのなかから任意に集められたチームによる、群設計の図面と集合した模型が用意され、審査を行いました。最優秀になった奥野さんの案は、昨年、プリツカ賞をとったアラベナの思想を想起させる、住まい手に対しても周辺環境に対しても思いやりのある提案で、私も共感しました。群設計特別賞になったBチームは、優秀賞をとった福岡さんの作品を真ん中に配置した集合形式でした。実は、福岡さんの提案する住宅は30作品のなかでも飛び抜け「利他的な住宅」でした。だから、この住宅の利他的なキャラクターを見抜く力があって、その性能を上手に引き出したチームが賞をとることになったと思います。チームのなかに福岡さんの作品があった幸運と、この作品を評価できた他のメンバーの力で、このチームが特別賞になりました。

「思いやりのある戸建て住宅」なんてヤワなタイトルでしたが、集合させて検証してみることで建築の評価軸が全く変わってしまうという事を経験しました。福岡さんの作品は単体では賞をとるのは難しかつたと思います。利他的であることを、これだけ鮮やかに評価できることは思ひがけないことでした。そういえば、資本主義の原理には「思いやり」なんてありません。フェアな競争によるマーケットメカニズムによって、動的平衡をつくるのが資本主義です。思いやりなんかして競争をしなかつたりすると、システムが崩壊するのです。と思えば、資本主義の終焉を迎えるといわれる現在、これから始まる新しい建築の状況を予感させるものであつたかもしれません。

北山 恒

第10回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2016

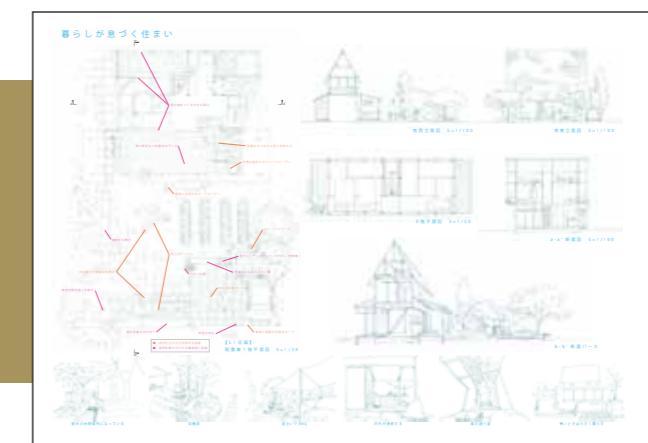
最優秀賞 暮らしが息づく住まい

関西大学 大学院
理工学研究科環境都市工学専攻 奥野 智士



Concept

住まうことは、場所とつながりを持つことである。
人々の暮らしさは、環境との応答を何度も繰り返すことで構築してきた。
住まい手の行為によって、場所への帰属意識が育まれることが、
周辺環境への思いやりを生みだすと考える。
商品としての閉鎖的な住宅ではなく、小さく、必要に応じて柔軟に変化することで、
暮らしが場所に息づく住まい。



優秀賞 羅生門の家

明石工業高等専門学校
建築学科

福岡 優



Concept

孤独死者の増加は現代の日本が抱える問題の一つであるが、この問題の要因の一つとして住宅が利己的になりすぎたということが挙げられる。

隣に囲まれ周囲との関係を最小限に保った住宅は現代の供給住宅の特徴であるし、高層集合住宅においては隣に住んでいる人が誰なのかすらわからないという人も多い。

その中で身体的に行動範囲が制限される老人が新たな人々との関係性を得られる場所はないだろうか？

また、孤独死が無くなることはないと予想されるこれからの社会において、独居老人が安心して死ねる場所はないのだろうか？

住宅地の一角を独居老人の住まいとする。

そして周囲の住宅の堀を取り払い住宅地全体を取り囲む堀を作る。

その門を担うのが独居老人の住まいである。

周囲の住民はこの住宅から外へ出かけて行き、この住宅から自宅へと帰って行く。

独居老人が住むことで敷地の利用率が少なく済むので、余った土地を周囲の住民の共用地として活用することができるだろう。

その中で独居老人は見守られ新たな関係性を築いていく。



優秀賞

お隣さんを誘う塀、それにまたがる私の家

東京理科大学 大学院
理工学研究科 建築学専攻

山口 薫平・小野塚 直



Concept

従来の家は、最大限広く、私有地を確保するために敷地の外周に塀をめぐらせ、私とお隣さんとの関係性を物理的に断ち切る。私たちはそんな利己的な操作を疑ってみる。塀に角度を与え、住宅の一部として引き込んでみると、そうすると私の敷地の一部が隣の人たちの場所となり、私の敷地にある机やベンチ、植物たちが隣の人に使われはじめた。塀に座って読書をしたり、塀の外でお隣さんとご飯を食べたり、塀が住宅の一部となり生活に寄り添い、家の内と外の関係が揺らいでいく。最も利己的な塀が最も利他的な振る舞いを始めると私とお隣さんとの私有的価値観が崩れ、柔軟で豊かな近隣関係が形成されるようになる。そんな利他的な塀がもたらす、思いやりのある住宅の提案である。

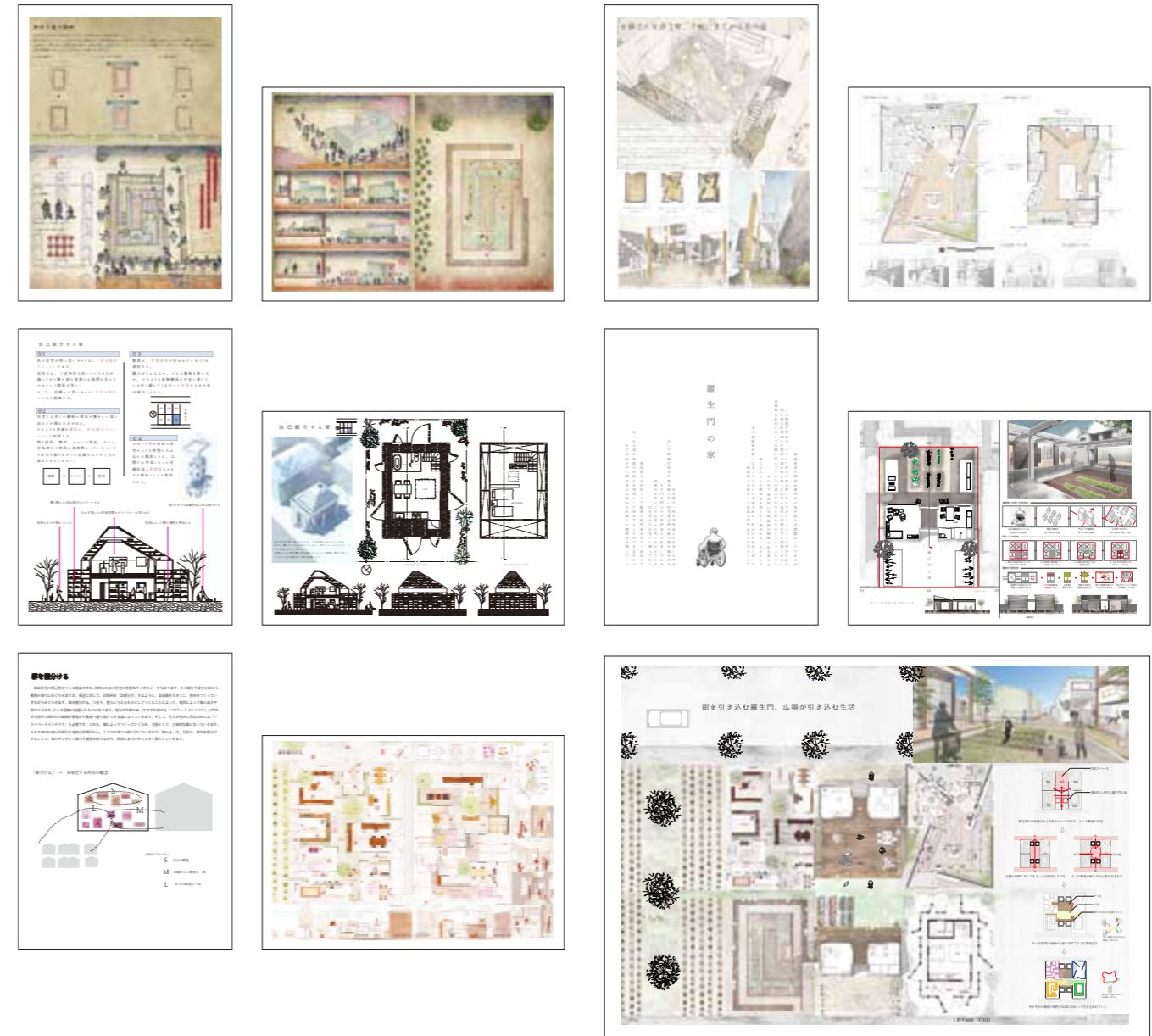


群設計特別賞

街を引き込む羅生門、広場が引き込む生活

Bグループ

月待 裕貴、山口 薫平・小野塚 直
牧田 光、福岡 優、住田 百合耶



特別実現採用賞・佳作 棲み家のおすそわけ

千葉工業大学 大学院
工学研究科
建築都市環境学専攻

秋山 怜央・川合 豊



Concept

周辺の環境に対して、時を選ばず、自由に参加できる場をもつこと。

それが「思いやり」のある建ち方だと考える。

住宅のすみを周辺にひらくことにより、街の棲み家をつくる。

街の棲み家の延長に、住人のふるまいが表出することで、他人が住人活動の場に参加するきっかけをあたえる。

1枚の壁に様々な棲み家が連鎖することで、居場所のグラデーションを生む。

1人になれる「孤独の場」と、複数で集まれる「参加の場」を選択できる、思いやりのある場をつくりたい。



第10回 JAPAN 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2016

佳作 (26点・順不同)



庭と屋根と太陽のいえ または街

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻

春日 広樹

このいえの庭は北にある。古来、日本建築には室内の暗がりから陽の当たる庭を見ることが美しいという価値観をもっていた。しかし、現代では南庭北住という配置によって、敷地の北側が悪い場所となり、北側に住む人、通る人にとって影を落としている。こういった価値観の転換によって住宅地に思いやりを与える。



ツナグ×シキル×シツラエル

日本工学院専門学校 建築学科 藤田 広樹

ツナグ …内部と外部を繋ぐ。人と人の間には境界線で区切られている。家と家の間、部屋と部屋の間には壁があり周囲から孤立している。他人との間に壁を作ったままでいいのだろうか。そこで他人との境界線を自由に作れる住宅を考えた。

シキル …自由に仕切る。境界線を作り変える仕組みとして間仕切り壁と外壁が自由に動くようにした。壁は天井に910mm毎に設置されたレールによって吊るされており、レールに沿って壁を動かすことで部屋を自由に作り変えることができる。レールの種類によって壁の動きを曲げたり、壁を入れ替えたりできる。ガラス戸やルーバーなど壁以外の種類に取り替えることで多種多様な部屋が作れる。

シツラエル …自由に空間を設ける。周辺の環境、家族構成に合わせて壁を移動させ、空間を作り替える。使わない壁は重ねて、空いたスペースに収納する。



ヤネとハコと、そのスキマ

京都工芸繊維大学 大学院 工芸科学研究科 建築学専攻
木村 明穏・木下 光平

夫婦と子ども二人のための住まい。本が好きな家族の生活が、外部の周辺の人々も豊かにするような住まいを提案する。

周辺環境に思いやりのある住宅を提案するため、半屋外空間のあり方を考えた。従来の住宅の半屋外空間は、内部空間を豊かにするものが多く、これがより住宅を利己的にしてきたのではないだろうか。

利他的な住宅のために、外部空間を豊かにする半屋外空間をもつ住宅を計画する。



屏が解く家

名古屋工業大学 大学院 工学研究科 社会工学専攻

村越 勇人・市井 曜

思いやりのある住宅とは、周辺に対して柔軟で、環境によって姿を変える建築だと考えた。そこで私たちは、周辺との“間”にたつ屏に注目した。屏は、当たり前のように動かない壁をつくり、周辺との関係を断ちきっている。その屏を、可動タイプ、付加タイプ、二重タイプなどさまざまな方法で解いた。時には閉じ、時には開き、その場の状態に合わせて姿を変えるこの屏は、住宅地における環境や人間関係をゆるやかに解いていくだろう。



断片を繕う縁側

近畿大学 大学院
システム工学研究科
システム工学専攻

月待 裕貴

住宅を取り巻く要素を再編することにより、私有地を越えた関係性を構築します。

現在の住宅はプライバシーを気にするあまり敷地に対して屏・縁側・住宅という順序で造られており、外側にある屏によって外部との関係が遮断されています。

本計画では、敷地に対して縁側・屏・住宅という順序の造りに再編することにより、これまで人と人を遮断していた屏が人と人を繋ぐ縁側になり、私有地を越えた関係性が生まれこれまでにはなかった風景が街に現れます。



光を纏う斜め帽子

大阪工業大学 大学院
工学研究科 建築学専攻

木原 真慧

近隣に光を振る舞う大きな屋根の家の提案。屋根に壁面や屏の役割をもたせて家を小さく構えることで、隣棟間に光を落とし、近隣住人の庭や住空間をより明るく照らしてゆく。この家がつくる境界は、近隣が暮らしに外部環境を積極的に取り入れるきっかけをつくり、やがて近隣と付かず離れずの緩やかな関係を育んでゆく。



水土(すいど)の家

横浜国立大学 大学院
都市イノベーション学府
建築都市デザインコース Y-GSA 中田 寛人

土地に根付いた外的環境を切り離さず、この家とまちで暮らしていく。

閉じられたハコが乱立する郊外住宅地で、SOHOや小さな市場の機能を持つ一つの家がこの街のハブの役割を担う。

30本の柱は、まちとの緩衝帯となり、小さな環境をまとめていく。

光や風への配慮、地域にとってのおもてなし空間が思いやりへつながる。

四方に囲まれた住宅が時とともに変われば、新しいしつらえを架構に増やしていく。

ひとつ屋根の下、発見と創造の毎日を暮らしていく。

第10回 全日本学生建築コンソーシアム 住宅設計コンペ 2016

佳作 (26点・順不同)



曲がり塀の家

東京藝術大学 大学院
美術研究科
建築専攻

國清 尚之

塀は家を守るために造らざれてしまう。だったら、塀をデザインすればよい。隣家に最も近いところで垂直に立てられる塀を、家側に向けて曲げる。すると家は、安心して敷地いっぱいに広げることができる。
また、曲がった塀は外界を取り込む余白となる。子供達が駆けたり親友達とホームパーティをしたり、他人と様々な距離感でつながることができる。
外界を引き込む家の“がわ”と孤独を解放できる“こあ”，思いやりの心を育む環境の下地を建築を作り出す。



自己紹介する家

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科
建設工学専攻

牧田 光

私の住宅が持つ思いやりとは、「自己紹介すること」である。
近年では、ご近所付き合いというものが減っており隣の家の家族とは挨拶を交わすのみという関係が多い。
そこで、隣への思いやりとして自己紹介する家を提案する。



貸し暮らし

名古屋市立大学 大学院
芸術工学研究科
朝妻 勇希・横瀬 健斗

郊外住宅地では、人口減少に伴って、大きな敷地に平屋の住居が建つか、もしくは外部空間を大きく取るような建ち方が考えられる。
そこで住宅の配置を見直し、外部空間を隣り合う住宅や周辺環境との共有空間としてつくることを提案する。
これまで外部から生活を守る役割を担ってきた住宅の壁は収納家具として、内外に取り出しができ、周辺と関わるきっかけとなる。例えば、本棚とベンチを収納家具の入っている壁から取り出せば、そこは図書スペースとなり、またテーブルと椅子を取り出せばカフェスペースとなる。このように外部空間で収納家具を貸して周辺地域の場とする貸し暮らしを考えた。



敷地境界面の家

九州大学 大学院
人間環境学府

相馬 貴文

「縁」として存在する敷地境界を「面」として再構成し、これを「敷地境界面」と定義する。家と家、家と道路を分断していた境界壁は上端に面をもち、領域を分けながら周囲と家を繋げる要素となる。住宅は4つのRC造のコアからなり、これらのコアが敷地をそれぞれ役割の違う4つの庭に分けていく。東の庭は境界面が少し高めである。庭を取り囲むように少し高めの境界面が周り、室内まで伸びてデスクや棚となる。西の庭は駐車場やエントランスとなるため、境界面は地上から持ち上がり大きな庇となる。南の隣地側の境界面は隣の家と繋がるテーブルとなり、それが室内まで延長されダイニングテーブルとなる。幅のある境界面には鉢植えなどが置かれ、生活感が演出される台となる。北の道路側の境界面は、壁を下げることで近隣の住民と繋がるベンチとなる。また、設備を隠すための目隠しどとなる。境界面はひだのように家を取り囲みながら、住宅地全体を繋げていく。



モテナシの家

大阪工業大学 大学院
工学研究科
建築学専攻

鈴江 佑弥

日本には昔から「おもてなし」の文化があった。建築は常にその文化に密接し、人々を繋げ豊かな社会を作っていく。だがこの考え方は今の戸建て住宅ではなく、あっても利己的な空間を求めるあまり薄れてしまっている。思いやりとはこのように、今薄れてしまった人を迎えるという姿勢にあるのではないだろうか。
本提案は、戸建て住宅において、もてなしの空間を考える。
そこに住む人、そしてその周辺に住まう人。人が空間を通してつながることができれば、家は周辺の集合場所となったり、休憩所ともなるだろう。建築にしかできないこの行為を中心とした家は、利己的と言われた家を利他的なものへと変え、人々をつなげるだろう。



まっすぐのびる家

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科
建設工学専攻

伊藤 信舞

隣同士が近すぎてなんだか息苦しいと思った。
作りすぎた料理のように、私たちのスペースを地域に少しあとそ分けしてみる。
敷地の中心に我が家の大きなフレームを建てることで、周りには通り道ができる。
大きなフレームには地面には縁側、2階にはリビングを設けることで、家の軸と周囲の関係を見やすくする。大きなフレームに自分たちの小さなフレームを組み合わせることで、通り道には様々な表情が見え、互いに影響し合う関係をつくる。
風が抜け、人が通り、暮らしの姿が溢れてくる。
ここにある程よい距離感は、心地良い空気が流れしていく。



きりかえの家

九州大学
芸術工学部
環境設計学科

宮崎 韶平

人を思いやるということは、自己犠牲のような押しつけがましい態度ではなく、利己と利他のバランスをとっていく、もっと優しい態度のことです。
住宅においてその態度は、住宅の部分や全体の、利己と利己を切り替えていく住宅であると考えました。8枚の回転扉を敷地の真ん中よりすこしづれた所に置き、回転軸から放射状に広がる4つの部屋と庭を絡めます。スケールの異なる4つの庭は利他的な、部屋は利己的な性格をそれぞれ持っています。その性格は回転扉を開け閉めすることでスイッチのように切り替わり、拡張したり反転したり混ざったりしながら、住宅の公共性や間取りを変えていきます。
住宅が住宅が完結せずに様々な機能をかかえ込み、扉を開くという日常的な行為で、自らそれらを切り替えていく。そんな建築を提案します。

第10回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2016

佳作 (26点・順不同)



いっぽよこへ

千葉工業大学 工学部
建築都市環境学科 岸田 和也

ほんの小さなことでいい。
小さな操作が生む、他人に気づかれないくらいの優しさ
家と家の隙間には利己的な空間が存在する。カーテンを開けても、隣の家によって
作り出された薄暗く圧迫感を感じる隙間では快適とは言えない。
今回私はこの隙間を隣の家の住空間になりうるものとして設計した。
その住空間は直接的に使われなくとも間接的に隣の家の内部空間を豊かにするものとなる。



窪む家

東京理科大学 大学院 工学研究科 建築学専攻
田中 比呂夢・松原 菜美子

「思いやり」とは人が普段通りの生活を送れるよう配慮することだと考えた。
周辺の住宅に与える影響が少なく、それでいて地域・生活が豊かになる住宅を提案する。



堀を裾分ける

横浜国立大学 大学院
都市イノベーション学府 建築都市デザインコース Y-GSA 住田 百合耶

堀は住宅の利己性をつくる要素ですが、同時に日本の住宅の重要なタイプロジーでもあります。その堀を今までと同じく、敷地の周りにめぐらせますが、周辺に対して、居場所を「お堀分け」するように、表面積を大きくし、窪みをつくっていきながらめぐらせます。堀を裾分ける。つまり、他人に与えるものとしてつくることによって、場所によって堀の高さや窪みの大きさ、そして視線に配慮したものになります。堀分けた堀によってできた窪みを「パブリックインテリア」と呼び、その窪みで囲われた隙間が敷地から敷地へ通り抜けできる道になっていきます。そして、人が豊かに住むためには「プライベートインテリア」も必要です。これも、堀によってつくっていくため、全体として、立体的な堀になっていきます。ここでは内に窪んだ部分を家族の居場所にし、テラスが周りに取り付いています。堀によって、生活の一部をお堀分けすることで、家中で小さく暮らす感覚を持ちながら、同時にまちの中で大きく暮らしていきます。



窓辺のミューチュアリズム

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻 早川 天平

できるだけ多くの庭に囲まれて生活したい家族がいる
自然をいっぱい取り込んで自然と一緒に暮らす生活
そんな豊かな環境を社会におすそ分けしたい
これは“見られる”ということを意識した住宅
これは風景を貸す住宅



生活が漂う家 -エンとドマとウラがつくるせいかつ-

京都工芸繊維大学 大学院
工芸科学研究科 建築学専攻 近畿大学 大学院
上田 晃平・樽本 光弘

提案するのは、単純な円が持つ内向的な特性及び周辺とのつながり方を、土間とウラを用いて最大限に活かした住空間である。
この住宅では3人家族の豊かな生活環境をまず第一として設計した、その結果として、周辺環境とのつながり方は住人が自ら、土間空間や「窓ウラ」「内向的ロッジア」を通して選択的に行なう。
「思いやりのある戸建て住宅」とは、そこに住むひとが自然に周辺との関わり方を選択できるような場を持ったものである。



町の中の大きな机

芝浦工業大学 大学院 理工学研究科 建設工学専攻 渡邊 寛介・Don Mello Senin Jean Marc

この住宅は、国々異なる二人の学生が考えた人々の繋がりを育む建築である。
親しい人、顔見知り、初めて会う人、そうした人ととの良好な関係性は相手を思いやることによって生まれる。本当の思いやりとは他者の立場で考え方理解し、また自身と真摯に向き合うことによって生まれる。公共空間と私的空间が適切な関係性を生み出す住宅を提案する。
中心性を持った大きな机が、町、敷地、住宅を一つに結び、通行人、お隣さん、家族の集う空間を作り出す。様々な賑わいを持った机に私的空间が寄り添う様に配置され、二つの間には曖昧な境界線が生まれる。生活の中でその境界は多様に変化し、閉じきった個室もみんなの集うリビングも机により質が与えられ柔軟に開放性を変化させる。
相手を思いやる気持ち、人々との繋がりから生まれる。そしてそれは国や文化、言語の壁も超えることができる。



壁が家

日本大学 理工学部 建築学科
市ノ川 貴之・伊東 亮祐・稻庭 香歩

思いやりのある戸建て住宅は、壁の厚みをもたせる事でうまれます。
普通の壁はただその場にあり、隔てるものとしてのみとらえられています。この普通の壁に厚みをもたせる事で空間に付随した棚や机が生まれ、隔てるもの以上の使い方を家族に提供します。
さらに厚みを持つた壁は、自分が空間化し一人一人の場所をみつけさせるものとなるでしょう。

第10回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2016

佳作 (26点・順不同)



息の緒の家

東京大学 大学院
工学研究科
建築学専攻

高橋 洸太

環境を共有する暮らし。
思いやりのある戸建て住宅とは、細分化された区画内で住宅と環境を1対1対応で最適化することではなく、周辺に呼応しながら環境・地域・生活といったあらゆる要素を取り込んだり、あるいは吐き出したりといった多元的な関係性をもたらす暮らしであると考える。
住戸を地面から浮べ、その下に温室を挿入することで住人にとっての生活の延長、そして周辺住戸にとっての庭の延長の場所とする。夏になると温室の建具を開け、街路から地続きに緑と風を運び、冬には光を取り込みその熱で暮らし、それを地域の住民が共有する。建具の開閉という生活行為を通して環境を共有する循環舗としての「息の緒の家」。



"おすそわけ"する家

法政大学 大学院
デザイン工学研究科
建築学専攻

藤田 涼

他人から貰った品物や利益の一部などを、さらに周囲の人達に分け与える"おすそわけ"という古くから日本にあった行為から、建築を考える。現在多くの住宅と住宅の間にはプライバシーを確保するための柵が張り巡らされており、どんなに豊かな犬走り空間であってもそこで佇んだり、自由に手を加えられるのは住人だけである。そこで、これまでのような周囲に対して自らのふるまいを感じさせず他者を排除するような関係性ではなく、そこで住む人や隣に住む人、またはそこを通る人達が自由に作り込める場所を用意することで豊かな環境をまちにおすそわけする。また、それらを眺められるようなふとした佇みの場を周囲に張り巡らし、一時的にその場所を占有できる状況を与えることで人々が互いに交わる外部空間をおすそわけする。また住人と他者を緩やかに関係づけるような視線の関係を、埠とレベル差によって作り出し、両者が共時に活動できる場所を作り出すことで、領域をおすそわけする。こうした豊かな空間を他者におすそわけすることで、他者との関係を築きながら様々な変化を感じることができると想定される容力のある住宅となるのではないだろうか。



『背中合わせの家』

横浜国立大学 大学院
都市イハーション学府
建築都市デザインコース Y-GSA

山岸 龍弘

脱いたスリッパを揃えたり、ドアを開けて待っていたり、雨が降りそうな時は目につく所に傘を掛けておいたり、思いやりは親しいひとに限らず誰か相手の事を想って行われる間接的な行為の伝達だと思う。全ての住宅は思いやりを生んでいる。
しかし、それは背中合わせに建ち並ぶ。これにより住宅が利己的と考えられてしまうのではないかと思う。もし、住宅が背中合わせに建つ事で相手への気遣いが街の一部となれば、利己的でない他利的な思いやりのある住宅に近づけるのではないだろうか。今回提案する『背中合わせの家』は一般的とされる住宅に切れ目を入れ、マンゴーの実を取り出すかのように生活空間と境界面の関係を裏返す操作をしている。街に投げ出されながらも家族は背中合わせにつながり、不思議な安心感の中で他の住宅の生活に触れる。生活の重なりの中で街は今より相手を想う。



Film house -住宅地の余白-

日本工業大学 大学院
工学部 建築学科

日本工業大学
工学部建築学科

若林 英俊・指田 尚樹

ポジティブな透明
この建築は軒下に大きく展開した複数のデッキと生活行為を誘発させる内部空間で構成されており、周囲を「ビニールシート」「カーテン」「障子」という異なる素材の膜に包まれている。
3つの膜は外・半外・内の3つの空間をゆるくも明確に分ける。半外空間では隣地と自邸の境に設けられたビニールシート層によって建築の輪郭を相互に歪ませ視線を遮る。また、プライベート性の高い内部空間は膜の重なりにより周囲から守られる。
隣接する住宅は、開口の重複を避けたり、目隠しを設けたり、近隣との折合いで双方に求められ開放性を欠いている。Film houseは輪郭を持たないことで住宅地の余白として周囲を思いやり、隣接する窓の常時開放や利己的な裏庭を設けるなど、周辺の住宅地に開放性を与える。



7分40秒の珈琲

早稲田大学
創造理工学部
建築学科

田代 夢々

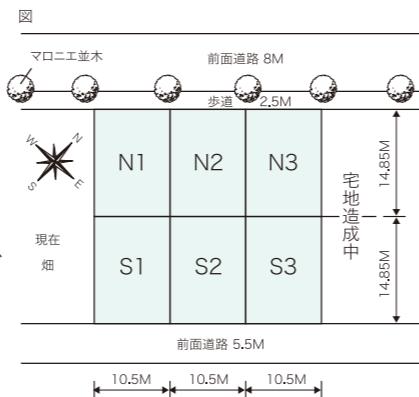
早起きした朝も、雨降りの昼も、風の吹く夕方も、心細い夜も、おじいさんが7分40秒かけて淹れる珈琲はいつも同じ味がする。
たった7分40秒だけ、わたしにとっては一回一回が永遠の7分40秒。
おじいさんとわたし、二人だけの7分40秒は、珈琲の香りに誘われて、気づけばほら、みんなの7分40秒になったようだ。



第10回 全日本学生建築コンソーシアム 住宅設計コンペ 2016

■第1次審査 審査委員:吉田研介、乾久美子、吉村靖孝

図に示す6区画(N1, N2, N3, S1, S2, S3)の敷地から各自1区画を自由に選び、法規制※以外、家族構成等すべて応募者が設定し、「思いやりのある」戸建て住宅を一戸設計する。(但し地下室は不可)
(※第一種低層住専用地域・建蔽率50%、容積率100%、防火地域指定なし)
合計30点を選出する。



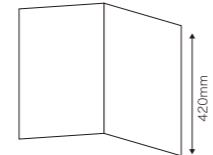
●提出図面 各階平面図: 1/50 [配置、外構等は1階平面図に記入。
屋外に置く設備器具、装置(例えはエアコン室外機等)はこの図面に明記。]

立面図: 1/100、2面以上

断面図: 自由

その他: 「思いやり」の工夫や提案は空いたスペースに分かり易く図などで表現すること。
(20文字を超える文章は不可)

○用紙: A2サイズ1枚、表面(1面)のみ使用。
横使いとし、これを図のように二つ折りして、丸めないで提出して下さい。
平面図は北方向を上。(方角の傾きは考慮しない)
図面の位置、レイアウトは自由。ケント紙程度の紙でパネル化は不可。
裏面に氏名、エントリー番号を記載すること。



●設計主旨 及び 計画の説明 ○用紙: A4サイズ1枚(表のみ1面)に400字以内。図を描くことは自由。

■第2次審査 審査委員: 乾久美子、吉村靖孝 (群設計との総合調整: 吉田研介)

(第1次合格者のみ)

模型提出。模型によって「最優秀賞」1名、「優秀賞」2名を選出する。

提出模型 1/50 注: 台となるパネルは敷地と同サイズ(21cm×29.7cm)とし、
市販のA4サイズの木製模型台を使用すること。
壁に垂直に吊って展示するので、それに耐えるように接着すること。
展示の際、事務局で金属製ヒートンを設置するので、吊り下げる装置は不要。

■特別「群設計」審査 特別審査委員: 北山 恒

第1次審査で入選した30名を特別審査委員会で5軒づつ(※注1)、6グループに分け、各グループ毎に、グループ番号と
グループ全員のメールアドレスを通知する。

グループの中において情報を交換、連絡し合って、全体敷地(31.5M×29.7M)の中で5軒を協議して配置し直しても良いこととする。

5軒全体の群として、外構の提案を行う。つまりグループで1案をつくり、その1案をグループの作品として提出する。

誰が実際に描いて仕上げるかはグループに任せる。

その6チームの中から「群設計最優秀」を選出する。

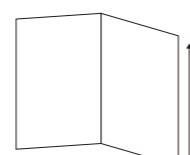
各自で製作した1次審査の時の提案が、「群設計」するときに多少変わっても構わない。

模型は最初の案か、群設計後の案かは各自の自由とする。

(※注1: 区画は6区画あるが、その中の1区画は共有のスペースとして各グループでどこにするか、どう使うか任意に決めて利用して良い。)

提出図面 敷地全体(31.5M×29.7M)の1階平面図: 1/100

[配置計画、外構計画も記入、空いたスペースは自由に使用して工夫したこと、
主張したいことを表現して良い。(20字以上の文章は不可)]



【群設計応募規定】 ○用紙: A2サイズ1枚、表面(1面)のみ使用。

横使いとし、これを図のように二つ折りして、丸めないで提出して下さい。

平面図は北方向を上。(方角の傾きは考慮しない)

図面の位置、レイアウトは自由。ケント紙程度の紙でパネル化は不可。

裏面にグループ番号、任意に付けた「グループ名」を記入。氏名等は記入しないこと。

参加方法

公式ホームページよりエントリー後、下記提出先へ「提出物」を送付 URL <http://www.jacs.cc>

参加資格

○2016年4月1日現在在学中の学生(大学・専門学校・短大・大学院他)

参加費

無し

提出先

1次 [図面郵送先 : JACS新潟事務局 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40(株式会社ステーツ内)
「2016設計コンペ係」宛 tel.025-383-5233

書類データ送信先 : compe@states.co.jp

図面書類をデータ化(pdf. もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダ(エントリー番号)にまとめ圧縮して送信

2次/群設計 [模型・図面郵送先 : JACS新潟事務局 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40(株式会社ステーツ内)
「2016設計コンペ係」宛 tel.025-383-5233

スケジュール

ホームページのみ
エントリー締切 2016年08月18日(木) PM5:00まで

第1次応募締切 2016年08月20日(土) 必着 PM5:00まで

第1次審査・発表 2016年08月25日(木) 審査 非公開
27日までに合格者のみメールで通知。
その際グループ分けとメンバーの氏名、メールアドレスを通知する。
2次審査の準備をお願いいたします。

第2次・群設計 応募締切 2016年10月29日(土) 必着 PM5:00まで

第2次・群設計 審査・講評会 2016年11月5日(土) 詳細については1次審査合格者にメールにて通知。

展示会 2016年11月6日(日) AM9:30~PM5:00

賞 金

●最優秀賞(1点) 賞金 100万円

●優秀賞(2点) 賞金 10万円

●群設計特別賞(1グループ5名) 賞金 50万円

●佳作 [上記受賞者を除く模型提出者] 賞金 2万円

●特別実現採用賞

第10回を記念して、第1次通過者(30作品)の中から「株式会社ステーツが」建設・販売可能と判断した作品を
実際に建設、販売いたします。その際の基本設計料を「特別賞」として支払うものとします。

(金額は審査委員と協議の上決定)

(但し、営業販売に適さないと判断された場合は「該当作品なし」とします)

注意事項

- 1グループにつき応募作品は1点とする。 ■他の著作権に触れる画像、文書などの使用は認めません。 ■雑誌、書籍、ホームページからの無断借用も認めません。
- 2次審査提出模型は審査終了後、返却いたします。その他の提出品は一切返却いたしません。必要な場合はあらかじめ各自で複写しておいてください。
- 本コンペの応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、入賞作品及び入選作品の発表に関する権利は主催者が保有します。
- 入賞後の応募者による応募内容の変更は認めません。 ■入選入賞後に、著作権侵害などの疑義が発覚した場合、これを取り消します。
- 応募作品にて著作権侵害などが発覚した場合、全ての責任は応募者が負うものとなります。 ■審査の結果については、何人も異議の申し立てをすることは出来ません。

事務局

全日本学生建築コンソーシアム 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40(株式会社ステーツ内) tel.025-383-5233

mail to info@jacs.cc 担当: 山本(ヤマモト)、深澤(フカツワ)

※応募に際して主催者側が取得した個人情報並びに提出物は、当コンペのみに使用されるものであり、その目的の範囲を超えて個人情報を利用する場合、事前に応募者にその目的を通知し、承諾を受けて行うものとする。